

E-10 家事労働に関する研究—実態と主婦の意識について—(第2報)  
奈良女大家政 ○野口孝子 足田洋子 近藤公夫 北村君

目的 最近の社会化現象に見られる様に、家事労働はかなりの部分が家庭の外へと出されて来ている。又女性の職場進出の増加や家庭用機器類の普及などにより、その実態および主婦の意識もかなり変化してきていると思われる。そこでこの調査は実際の担当者である主婦の最近の家事労働の実態と意識を知る為に行なったものである。前回「農家主婦の場合」について報告したので、今回は農家とサラリーマン家庭について職業別の比較を試みた。

方法 奈良市近郊の農村地帯の農家の主婦、および旧奈良市内のサラリーマン家庭の主婦各200名を対象に、家事労働の実態と意識について個人面接調査を行なった。時期は農家が昭和45年12月と46年1月、サラリーマン家庭が46年6月である。

結果 ①主婦の1日の家事労働時間は農家よりサラリーマン家庭の主婦の方が長く特に食事の用意・掃除・買物に有意差がみられる。②家事協力者の有る家庭は農家の方が多し。有職の主婦にとっては家事協力者は時間の短縮に役立っている。③家事を負担に思う人の割合が高いのは、農家では年代が若く・家族人教が少なく・家事協力者の得られない人であり、サラリーマン家庭では家事以外の活動をもっと積極的にやりたいと思っている人である。④主婦の家事志向は、全体的には「家事中心型」が多いが、農家では特にその傾向が強く、サラリーマン家庭では「両立型」も多くなっている。